

## 「未刊津田左右吉日記」補記

柴田光彦

さきに本誌第二十号に掲載した「未刊津田左右吉日記」には内容からみて明らかに、夫人の記述が混入している。このことにつき、二、三の方からも御指摘御注意を受けた。

当初は二回にかけて掲載の予定であったのを編集部への要請により急遽一度に載せることになり、終りにこのことにふれねばならぬと思いながら、それを省略してしまったことをおわびする次第である。

津田博士の筆跡と夫人のそれとが、容易に見分け難いほど酷似しており、内容的に別人のものであっても、いずれの筆跡か区別がつかなくなり、あるいは代筆かと思われる疑いのあるところ、またいずれの記事が峻別し難いところもあり、数々の疑いも棄てきれぬために、明言することも憚られ、そのまますべてを掲載することにし、題名も「夫妻」日記とすべきか否か、編集途上では相談もしたが、結果としては表記に落着いた。

明治四十四年十一月七日（火）に、「日記をかく約束であったが、ついなまけて

……」云々の記事が見えるが、あるいはこの時期には、夫妻が交互に日記をつける習慣になっていた、共同の日記帳であったのかも知れない。ところによつては相手になり代つて記述した箇所も自づと生じたものと思われる。

いずれにせよ、余人には窺い知れぬことであるかも知れない。

## 後記 雑感

「今後における学術情報システムの在り方について」と題する学術審議会の答申が、本年一月文部大臣に提出された。その内容は、国の学術情報政策の方向を示すものとして注目される。

大学図書館の現場で働く私たち自身にとって、これは決して無関心ではられない性質のものである。

全国的な、あるいは国際的なシステムをとおして、学術情報の共同利用と有効利用を推進しようとするこの政策のもとで、大学図書館は、一次資料の整備にもとづく所在情報のデータベース化と原文献の提供を行ない、情報検索システムのなかで知的要求と資料とを仲介する役割を果たすことが期待されている。

このような答申に沿った国の施策が真に生きるか否かの根本は、やはり事に当る人の努力にあることを、私たちは自覚しなければならぬ。

（高宮 秀夫）

館蔵の「洋学者番付」は、たった一枚の資料であるが、多くの人に利用されている。これは貼込帳の中に保存されているが、図書館資料の中には、このような